五省会ニュース

発行所
医療法人財団五省会西能病院
〒930 富山市五福1130
TEL (0764) 41−2481(代)
発行人　西能 正一郎

五省
一、至誠に悖るなかりしか
一、言行に恥ずるなかりしか
一、気力に欠くるなかりしか
一、努力に憾みなかりしか
一、不精に亘るなかりしか

食事ラッパが鳴り響く

西能 正一郎

飽食の時代では考えられない

少しでも多いと安堵感

今頃の季節になってきますと、私は海軍兵学校の練兵場で見た広島原爆の不気味な茸雲と、すざましい爆風をまざまざと想い起すと同時に、敗戦前夜のきな臭いような兵学校生活が走馬燈のように頭をよぎります。

三十九年前の私は、ようやく十七歳になったばかりでした。丁度今頃は入校教育も終って二カ月半、軍隊の生活にも馴れ始めて、少しは物を考えるゆとりの出来る時期であります。伸び盛りの子供達にとって、いつ一号生徒の雷が落ちるかわからない状況下にあっても、三度の食事はやはり待ち焦がれたひとときには違いありません。

食事のラッパが鳴り響き、二千人を収容する大食堂に、津波の押寄せるかの如く、ひたひたと生徒があふれます。定められている各自の席の前に直立不動で立つ一瞬の静寂の後に、当直士官の「かかれ」（食事始め）の号令があり、二千人が一斉に食事を始めるうねりの様な音に変ります。しかし、私共三号生徒には、ゆっくりと御馳走を味わっているゆとりはありません。

食事の間に必ずといってよいほど「食後直ちにカッターの整理にかかれ」などと命令が発せられるからです。これらの仕事のほとんどは三号生徒の果さねばならない使役であり、そしてそれをいかに正確に早くなし終えるかが分隊毎の競争となるのです。口を拭い服装をととのえ、当直士官の「ひらけ」（退ってよし）の号令を今や遅しと待ちかまえていたわれわれは、音をたてないようにすると食堂を退出し、脱兎の如く命令を果すべく駆け去るのであります。

当時、国民は食べる米もない耐乏生活を強いられていたのに、私共には食事だけは大きなアルミ食器にたっぷりと盛付けていただけました。うかうかすると「かかれ」から「ひらけ」までの短時間に、目を白黒させても、のどが通らないこともしばしばあり、食事を残したことがバレると「陛下から賜わったものを粗末にする奴」と鉄拳が飛んできます。それを恐れて鵜呑みにすると消化不良の下痢に悩まされねばなりません。

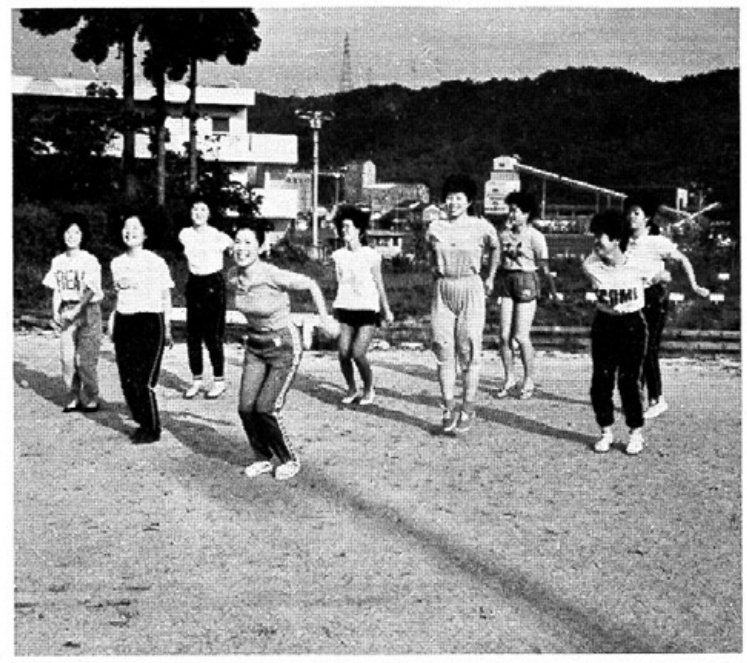
考えてみれば、食事がたっぷりあるということは、絶対絶命の苦行であった筈でした。しかし、しかしながらです。私は食事ラッパが鳴り終り天の一角を睨みながらしずしずと自分の食卓へとすむときに、チラリと自分を待っている食器に目をやって、ご飯の盛り方や、魚の切り身が戦友のそれよりも少しでも多く見えるときには、いい様のない安堵感に包まれて食卓の前に立ったのであります。

食い物の多いことは自分を苦しめることなのだと、理屈ではいやというほどわかっておりながら、別の自分が少しでも多い事を希求している道に墜ちた絶望感にさいなまれる日々を過しました。戦いに敗れ、兵学校が解散する日まで私はこの地獄から脱け出すことが出来ませんでした。

世の中に物が満ちあふれ、飽食の時代に生きさせていただいている今でも、あの時の自己嫌悪が鮮烈によみがえり、生きようとする人間の執念の恐ろしさを認めざるを得ないのであります。

夏本番

はつらつ八人組



空気の味　午前6時に起床して近くの空地で体操。すがすがしい朝風がほおをなでる。「さあ、空気をいっぱい吸いましょう」。爽快な味がする。前列手前は山本看護部長。

今春、県内の高校を卒業して西能病院に就職した八人の乙女たちは、同病院の職員寮で寮生活。午前中は病院で看護助手、午後から看護専門学校に通っている。三カ月余りの寮生活について—

「寮生活のすべての費用は自分でいたお金。節約を心がけるようになった」（村上和子）「掃除、洗濯を自分でして、母の気持ちがわかった」（小沢優子）「炊事、洗濯などを自分でやることが生活の一部になった」（山崎真由美）「身についたことがたくさんある。楽しいけど、大変だと思う」（吉田早苗）「いつも笑いが絶えず楽しい。お互いに励まし合うことができるので心強い」（石若直美）「自分勝手なことが出来ない共同生活の大変さや、難しさがわかってきた」（平井恵美）「これからもみんなで協力しあって努力していきたい」（郷田美樹）「いやなことも楽しいことも八人でわけあっている寮生活を送りたい」（黒畑喜美子）

毎週（火・木）泊りこんで、生活指導している山本玲子看護部長は「常に学ぶ姿勢が大切だが、社会人としてのマナーを身につけ、好感のもたれる看護婦に成長してほしいと語っている。

みそ汁の味　山本看護部長の勧めによる当番制の朝の食卓。必ず熱いみそ汁をすすり、母を思い出す。

スイカの味　夜の談話室。スイカの差し入れがあった。「みんなで食べると、おいしいわネ」ワイ、ワイ…

あすなろ

▼昔は〝つるべ〟を友人とかわるがわるあやつって井戸水を汲み上げてのんだ。山道では冷たい湧き水を両手で受けてノドを鳴らした。そして、焼け跡にむき出しの鉛管の水道に口をつけてラッパのみした。それが昭和三十年ごろまでの日本の風景だった。食糧の乏しかった今の三、四十代の人が「水を飲んで育った世代」というのもうなずける気がする▼ところで最近、全国で「おいしい水」がやたらに宣伝され、パック詰めの水が売られている。水が急速にまずくなったせいであろう。大都会の水道のカルキ臭、カビ臭は確かにひどい。しかし水のおいしい地域はまだまだ多い。とくに富山県内の水は「穴ん谷の霊水」をまつまでもなくおいしい伏流水がこんこんとあふれている。それなのに子供は水を無視し、次々とジュースを空にする▼そればかりか親子して水を大切にしていないようにみえる。水への感謝を忘れることは、水ばかりでなく伝来の文化を捨てることだ。まず日本の誇る食文化の破棄を意味する。茶の湯はもちろん、日本料理は良水が第一条件。「刺身」や「酢のもの」などの生食や、「すまり汁」、とくに夏の味覚は、「洗い」にしろ「冷やしそうめん」にしろ水が生命ということを忘れてはなるまい▼水につけてあげたザルで水を切っても味覚に先立ってまず動くのは微妙な嗅覚だ。だから昔の名料理人は道を遠しとせず名水を汲みにいったといわれる。〈清滝の水汲ませてやところてん（芭蕉）〉水の貴さを忘れぬことは健康になって病いを忘れてならぬのと同じだ。

昭和59年盛夏

暑中お見舞い申し上げます

医療法人 財団五省会

理事長 西能正一郎
常務理事 林 敏彦
理事 住 栄作
理事 米田 寿吉
理事 岸口 繁
理事 西能 綾子
監事 石川 実
監事 筧田 英二
評議員 稲垣 忠一
評議員 尾山征一郎
評議員 重松 尚
評議員 神沢 幹夫
評議員 西能 孜
評議員 西能 竑
評議員 坂本 重一
評議員 土田 亮一
評議員 豊田 文一
評議員 古沢 富美
評議員 堀 政夫
評議員 松井元太郎

西能病院職員一同

健康法の問題 (22)

矢野三郎

わが国もついに世界一の長寿国になった。しかし、有頂天になっているときでもなさそうである。今、日本には百歳以上の長寿者が一、三〇〇人もおられるが、このうち、かなり活発に動ける人は約一割にすぎない。健やかに老いることはむつかしい。そこで、長寿の時代になるとともに、健康に対する不安がますます増大することになる。

「健康病」という新しい病気が問題になってきた。

いたずらに長生きしたいと思っている人はいないかもしれないが、健康でありつづけたいという気持ちの願いである。この健康を保ちつづけたいという心のあせり、健康に対する不安、健康を失うことに対する恐怖心、こういった心理が原因になって、「健康病」がおこってくる。何でも「健康」「健康」である。かつて、われわれ人間は「自由と平等」を求めるために努力したが、今の時代は「健康と自然」がこれに代っているといわれている。

マスコミが増悪に拍車
〝健康病〟が社会的問題に

ニューヨークでは食事に人を招くのもむつかしくなっているという。肉を食べない人、卵の入っているお菓子を食べない人、米やパンを食べない人、食事の前に必ずグレープ・フルーツを食べる人、繊維の多い野菜ばかり食べる人……など千差万別のダイエットを厳守している人が多いからである。「健康病」は個人の問題にとどまらないで、社会的な問題にまで展開している。

「健康病」の治療はむつかしい。現在、多少とも役立っているのは、各種各様の健康法であろう。何か一つの健康法を行うことによって心理的な不安感が取り除かれる。しかし、健康を維持してゆく上で有効であることが、客観的に証明できているものは一つもないといってよい。

一方、「健康病」を増悪させているのは、新聞、雑誌、テレビなどによる医学知識の普及である。医者が一人一人の患者に詳しく説明できないところを、こういったマスコミがたすけているが、これを正しく理解し、正しく用いることができないのである。糖尿病の記事がでると、糖尿病ではないかと心配し、脳卒中の番組をみると、もしかしたら…と不安になる。

健康を維持増進させるためにはどうしたら良いか。どうしたら健やかに老いることができるか。現在、流行中の「健康病」を治療するために、結局は、医学がこれに応えなくてはならない。が、現在の医学は「健康病」に対してあまりにも無力である。今の時代は「これまでの人間の歴史になかったほど進歩した医学が存在し、それにもかかわらず同時に、過去にはなかったほど、多くの病気と患者が存在する」といわれている。

医学が今までのように、病人を治療するという立場を重視している限り、この矛盾を解決することはできないであろう。将来、医学が「健康科学」、さらに「健康教育」の領域にまで発展してゆくときに「健康病」の治療も可能になるであろう。

（富山医科薬科大学・教授）

「息子だと思っている病院を」と、西能院長のあいさつを受ける見学者たち

奥さま社会見学

あふれる患者さん本位のサービス
〝早く良くなってください〟

恒例の「奥さま社会見学」（富山新聞主催）の一行五十人が六月十一日午後二時ごろ西能病院を訪れた。

五階ホールで、中島総務部長から「信頼と奉仕をモットーにして」と、西能精神や病院の概要説明、西能院長から「地域の皆さんに求められるよい病院づくりを目指して、より高度な医療と、心の通うサービスの二つを重視し、一丸となって努力を重ねている。自分の息子だと思っている病院をよく見ていただきたい」のあいさつを受けた。

このあと四班に分れ、一時間にわたり各室を熱心に見て回った。

見学者は一様に、「明るく清潔で、どこを見ても、患者さん本位のサービスがみちあふれている」と話っていた。

つぎは新湊市中新湊の高井幸子さんから寄せられた見学の感想文。

――五階、四、三、二、一階と説明を聞きながら拝見させていただきましたが、本当に、県内随一の西能病院でした。

最新の医療機器、広いリハビリテーションなど安心して治療を受けられると思いました。

ホテルの一室を思わせるような特別室、明るく広いデイルーム、温泉を思わせるような大浴場、患者さんの気持ちを考えてつくられていることが随所に見受けられました。

病室も大変明るく、患者さんも明るい顔が多いように見えました。中にはお苦しそうな人もおられましたが、この人たちも毎日のリハビリテーションで先生や看護婦さんの力添えで治療を続け、早くよ良くなりますよう、心からお祈りいたしました。

私たち家族は、みんな元気ですので病院のことは全く知らなかったのですが、見学させて頂き、大変勉強になり、有難いことでございました。

先生、看護婦、職員の皆さま、ますますお元気で、日本一の西能病院になりますよう念願いたします。

なお、この日、一行は宝飾店、きもの学院、結婚式場、精米センターなどを見学した。

（富山新聞主催）

医療の周辺（上）

放任された医業広告
医療法に従い再検討を

――西能先生は海軍兵学校のご出身ですが、豊田先生の軍隊のご経験は……。

豊田　そう、五年半ですね。初めは北支に二年半、次は南方のトラック島に二年半、それに内地にいた分も合わせますと。もちろん、軍医としてですが……。

西能　トラック島へはいつごろ……。

豊田　あれは昭和18年も歳のつまった12月24日でした。野戦病院の先遣隊として宇品港を出発したんです。

しかし、行く先は全く知らされません。野戦病院長から「現地へ先行して師団司令部の指示を受け、病院設営の準備を行い、本隊の到着を待て」との命令を受けただけですから。

西能　昭和18年の暮れといいますと、南方戦線はまさに風雲急を告げているころですね。輸送中は危険だったでしょう。

豊田　それはもう。輸送船は六千トンですが、船体は赤錆だらけ、時速八ノットの老朽船なんですよ。豊予海峡をでると、もう米潜が跳梁しているというんでジグザグ航行なんです。両側を海防艦二隻で護衛してくれましたが、本当のところ心細かったですね。船倉にいると、ときどき腹の底まで響く爆雷投下に肝をつぶしました。

西能　トラック島へのお道は遠かったんですね。

豊田　そう、そんな状態で十日間ほどたち、やっと私たちがトラック島に向かっていると正式に知らされました。そういわれれば、なるほど気温は上昇し、前方には数知れぬ島々が重なりあい、緑に映えているんですね。

同僚は、港内にえらくでかい軍艦がいるというんです。それもそのはずで、連合艦隊の集結だったんです。大和、武蔵、長門の戦艦、翔鶴、瑞鶴の空母、そのほか重巡などです。ところが、これらの艦隊も一夜にして姿滅的な打撃を受けており、消を消しました。各地で潰移動したわけです。

トラック島の惨状は戦史の伝えるとおりです。

私は現在、トラック島野戦病院の戦友会会長をしていますので、近く三度目の現地慰霊祭の旅にでかけるつもりです。

農民の健康に着目

――大変なご苦労があったんですね。話題は変わりますが、先生は農村医学に着目された動機は

なんでしょうか。

豊田　西能先生もよくご存知だと思います。高岡の病院（現厚生連高岡病院）で、いっしょに働いたほうですから……。

当時、農村は疲弊していまして、小作という名の生活者の暮らしぶりいまの人たちには想像もつかんですよ。

地主は坐っておって小作米を取っているわけです。私の憶えているころは、小作の収入の55%を地主が取りあげる。小作の45%の中には労力や肥料代が含まれている。小作の人たちは貧困にあえぎながら過重労働へと追いこまれる。勢い健康をそこねることになる。ですから都会と農村の人たちとでは健康に大きな格差があったんですよ。まあそんなことから、農村の人たちの健康に目を向けたわけです。

――農村医学の今後の課題は、どんなことでしょうか。

豊田　まず農業の問題ですね。

日本がこれだけ増産をやれるというのは、化学肥料と農薬のお陰なんです。たとえば、昨年はイネミズゾウムシですかね、それが県下に発生し始めたとき、大沢野町あたりでくい止めたんですが、農業がなかったら県下全般に広まったでしょう。

ところが、この農業は人体に大変有毒でしてね。つまり、防除に使う農薬から、いかに健康を守る

わたしはこう思う

筆者偶感

今回は豊田文一先生と西能院長の対談。豊田先生は元金沢大学学長、元富山県医師会長、元富山県公安委員長、現金沢大学名誉教授、富山県民医師会顧問、富山県農村医学研究会会長……と肩書多数。いわば医学医療界の長老的存在である。西能院長のことばを借りると「農協高岡病院でご指導を受けたり、現在は県農村医学研究会でお世話になっており、大恩人です」。さて、その農村医学研究会の集まりのあと、この対談となったが、くつろいだ雰囲気のなかで話ははずんだ。

「農薬から、いかに健康を守るかがテーマです」と豊田先生（左）。向かいは西能院長

農村医学 農薬と健康が課題
農薬は〝両刀の剣〟

いましたね。現地人は能率があがると喜んでいたようですが、一度故障すると終わりなんです。なぜかといいますと、日本ではひと昔まえのものですから、部分品はないんです。最近はそんなことはないと思いますが、日本の商社もあくどいことをしていたんですね。

違反目立つ医業広告

――豊田先生は、かつての県医師会長、現在も顧問の立場においでになりますが、医師会に対するアドバイスなんかございますか。

豊田　そうですね、関心があって「県医報」や「医事新報」にも書いたことがあるんですが、広告自粛規程というの、あれどうなっているかなあ。結論的にいえば、医業法に決められたとおりやるべきだと思いますね。

西能　いまのところは有名無実になっていますね。

豊田　婦人科あたりは分娩手術と書いている。いしいと静岡茶といったしょに強壮性の農薬も飲んでいたかもしれませんね。

農薬ばかりじゃないんです。当時は東南アジアあたりへ日本の農業機械をどんどん輸出して

かが重要なテーマです。

西能　かつては農薬を散布中に中毒で倒れ、入院してくる患者さんがよくありましたね。

豊田　そうそう、ちょうど農薬が出回ったころでね。非常に効いたんですが、逆に人体には強い有毒性があってね。

猛毒性農薬 台湾へ

私、台湾へ二十年前にいったとき、農村を案内してもらったんです。台北から四十キロほど隔たった山手の農村ですがね。そこでは緑茶と紅茶を栽培しているんですが、農民は日本のお陰で収量が非常にふえたと喜んでいる。それで、農家へ入ってみますとね、日本から輸入したパラチオンが所せましと積んであるんです。これは日本で最初の強毒性の農薬で、すでに禁止になっているものなのです。それを散布しているんですね。

それだけなら、まだいいですよ。その緑茶を静岡から買いにくるというんです。私たちがおいしいおいしいと静岡茶といったしょに強壮性の農薬も飲んでいたかもしれませんね。

農薬ばかりじゃないんです。当時は東南アジアあたりへ日本の農業機械をどんどん輸出して

を読んで知っている人が少なくないじゃないかなあ。しかし、これはすっきりさせなければいかんことだね。

――ところで、最近医師のモラルがやかましくいわれているようですが……。

豊田　昔もそうした問題はありましたが、いまほどひどくはなかったですね。

もちろん、医師の診療報酬にもかかわっていると思いますがね。もう少し技術料を上げるか、或いはアメリカのように非常に厳しい専門医制度をつくるしかないでしょう。

いま専門医といっているのは学会で決めたのであって、法的には意味はありません。

アメリカなんかは、法的に認められている。だから診療報酬は一般医にくらべて四倍か五倍ほどでしょう。一般医と専門医とは厳然とした区別があるんです。それでアメリカは社会保険が普及していないから、民間の保険会社が肩代わりしているのが特色ですね。

この点、フランスの医療制度は現物給付です。つまり、患者は窓口でお金を支払っていく。ところが保険請求は日本の支払基金といっしょで、ちゃんとけずられるんですね。けずられるとお医者さんが損する。しかしよく考えたもので、けずられた分だけ再保険で補う会社があるんですよ。〝ところ変われば……〟ですね。

（つづく）

思い出を語る〈15〉

〝誇り〟でいっぱい 持ちつづけてきた緊張感

司会　昭和四十年四月に完成した第一期増築工事の鉄筋三階建てにエレベーターの設備がなくて不便だったと思いますが、どうでしたか。（現在は二台あります）

鐙　そのことが一番思い出になっていますね。なにしろ、男が少なかったものですから、「鐙さん、手伝って」としょっちゅう駆り出されました。患者さんを〝おんぶ〟したり、担架を持つのに協力したり。とにかく腹が立ったことだけは本当でした。（笑い）

三日市　その当時、エレベーターつくるのに、一階分と同じ値段の三千万円はかかると聞いていましたが…。

院長　そんなことはありません。そりゃ三百万円でしょう。つくらなかったのは銭（ぜに）がなかったからです。それから、星井町時代に担架でやりとげた豊富な経験があったから、できないはずがないと思いました。

出席者（紙上参加を含む）△元勤務者＝開発正子、三日市久子、竹腰美奈子、池田千佳子△現勤務者＝津田勝美、川西信子、広長百合子、鐙賀、伏木峯子、米田絹代、寺崎民子、津田美智子、井上千恵子、森田由紀△西能正一郎（院長）△西能薫（副院長）堀政夫（顧問）古沢富美（顧問）△司会＝中島廣（総務部長）石倉喜一（サービス担当）＝敬称略＝

一同　患者さんも、食事も、なにもかも人手だったので、苦労したことは確かでした。仕事に追われながらも、顔をまっ赤にしてふんばり、やりとげてきました。患者さんを担架から落としたことはありませんでしたが、かたがって、〝あっ〟ということはありました。

院長　いまは、こんなにやさしく、ネコみたいなもんだがなあ。（笑い）

井上　私は西能病院の前をウロウロ、横をウロウロ、入りたい一念でウロウロしたものです。そして念願を果しました。そして、私たちがここまでこられたのも、〝こわい〟〝きびしい〟といいながら、なにがなんでも院長の指導方針にしたがってきたおかげだと思っております。しぶとく、そして油断もスキもない気持ちを、ずっと持ち続けてきました。（笑い）

本当ですよ。皆さんもいっしょだと思います。かっこうをつけていっているわけではないですよ。誇りでいっぱいです。

（沈黙）

司会　有難うございます。井上さんのお気持ちは、よくわかりました。ところで、給食でヒヤ汗をかいたことは…。

井上　あってはいけないことがあるんです。髪の毛やハエなどが入って患者さんは担架にしがみついて、真剣そのものでした。その当時の担架はお粗末でしたからね。

「兵隊集まれ」の軍隊式召集も、かかったものです。「〇〇さんは力があっていいわね」とか、なんとかいって、にこやかなふん囲気のこともありました。（笑い）

司会　井上さんは院長に怒られた経験は…。

井上　私ら裏方（給食）は院長と顔を合わせることが少なかったのですが、いつも見られているような気がして、〝こわい〟という感じでした。

院長　いまは、いまも同じです。それは、こんなにかっこうをつけていてくれるんですから、当時はどうでしたかね。

井上　私がきたころ（昭和四十年）は、それが毎日毎日、やき肉の一点ばかりでした。焼いたといっても冷たいのがいったい食べられるのかと不思議と思いますが、こんなにきじゃないですね。

副院長　院長は肉が好なくらいですね。

（つづく）

厚生大臣賞の祝賀会

日本病院会の代議員（現常任理事）として病院事業発展に尽力した功績で、五月に厚生大臣賞を受けた西能院長をたたえる祝賀会が、病院職員有志によって六月七日午後五時半から五階ホールでひらかれた。

発起人を代表して三原美樹雄さんがお祝いの言葉をのべた。

西能院長は「これからの励みに対する賞だと考え、さらに努力していきます」と挨拶した。

三原発起人代表からお祝いの言葉をうける西能院長夫妻

続 ハリ治療

「鍼」は苦痛を封じこむ手段

「ハリ」とカタカナでは、「鍼」という漢字です。しかし「鍼」を「ハリ」と読むのは難しいので、カタカナで代用しています。

ハリ治療の発祥の地は、今さら申すまでもなく中国です。中国において、意志の伝達手段として記号の「漢字」という文字を生み出しました。故に「漢字」は、それ自体が意味を持っているのです。例えば、山→⛰、上→〇といったように。

書いていますが、正しくは、「鍼」という漢字です。

「ハリ」という文字にどのような意味を托したのでしょうか。

鍼という文字は、金と咸との組み合わせであります。

咸の字の変遷を見ますと、図Aの甲骨文字に示されているように𠦪と𠦪との組み合わせです。𠦪とは口であり、上古におけるほこ（武器）を表わす象形文字です。口は「くち」です。

即ち、オノをふりかざして、「静かにせよノ声を出すと殺すぞ」と、おどしてその口を封ずる動作を表わした文字です。

故に「封じこめる」という意味を持つのです。

これに糸へんをつけた鍼は、封鍼の鍼で、入り口を糸をもって閉じて、中に封じこめることを表わします（図B）。ぎを添えた鍼は、水の流れを封じて流量を減少することを表わすのです（図C）。

これに金へんを添えた鍼とは金属の「ハリ」であり、金属の「ハリ」の出現する前には竹パリを用いたので「簸」の字を用いました。従って古代の人は「鍼」という文字に「病人の苦痛を封じこめる最も有効な手段」という意味を托して、この字を生み出したのです。

（甲骨）A 𠦪　B 𠦪　C 𠦪

（金文）𠦪

（篆文）咸 鍼 簸 鍼 減

（楷書）咸 鍼 減

（西能病院ハリ治療室川口知明）

わたしはこう思う

農村医学 農薬と健康が課題
農薬は〝両刀の剣〟

美しいものが見えてきた

〈第二十一信〉

松下英勝

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

このほど、「浜坂サンビーチマラソン大会」に参加いたしました。生まれてはじめてゼッケンを胸につけて走りました。

「NHKフルマラソンに参加の身障者は超エリートで、自分の生活の中には見当りません。違った次元の人達です」と、書いた記憶がありますが、そのメンバーが10キロクラスに参加しました。自分たちの走る五キロクラスとは違いますが、人間的には一歩も引けを取らずに接しました。

それはさておき、昨年十月に亡くなった井戸英勝君のお母さんに「お母さん、松下英勝は、井戸英勝の分もあわせて、一台の車椅子で〝二人英勝〟を走ります。決して恥かしくないレースをします。どうか、心の中で応援して下さい」と書き送りました。

〝二人英勝〟のマラソン、完走

ルールの説明で、4キロ走る間、車椅子が止まったり、後退すれば失格といわれ、トギッとしました。完走に自信がなかったのです。そして、手渡されたゼッケンのNo.が4番。早柏指導員は欧米の選手は喜ぶ云々と励ましてくれます。

「死番」という変な語呂あわせをしてスタートしたのですが、結局、完走!!自分は不思議な気がします。どこに、こんな力があったのかと、何か、目に見えない力が作用したのかと。

5キロレースは、愛育園職員の片山女史が優勝し、帰途の車の中は、早柏、片山、松下が、それぞれに満足し、帰ってきました。

院長先生、自分は今年年頭に「何か善い年になりそうだ」と書きました。

「鳥取砂丘、雪の旅」「わたぼうしコンサート大成功」そして「サンビーチ、マラソン完走」などなど良いことづくめです。

いずれにしても暑くて、仕事もボツボツでしょう。また秋から頑張ります。これから手話に並行して押し花の通信教育を勉強します。いつになるか判りませんが、出来上ったら作品をお送りします。

（姫路市打越一一〇〇、重度身体障害者授産施設、愛光園）

出発前　やる気じゅう分。
口で、手袋をつけているところ。
横の女性は愛光園の片山さん。
4キロ優勝者です。

止まるな　まるで止まっているように見えますが、走っています。
〈情けないぞ松下!〉
自分を叱りつけながら……。

ゴール寸前　喉はカラカラ、腕はガクガク。がんばれ松下!フレーフレー松下!

大地を踏む ⑲

黒瀬　由美雄さん（四七）
上新川郡大沢野町

夢ふくらむ〝青い鳥〟

七月の暑い日の午後三時すぎ。大沢野町上大久保、乳幼児の保育園〝青い鳥〟は、ちょうど、おやつの時間。

小っちゃい椅子に、ちょこんと坐って行儀よくパクついている園児たち。それをながめながら、黒瀬由美男さん（四七）、奥さんの浩子さん、保母の斉藤由紀子さん、林由美子さんたちはニコニコ顔……。（写真）スヤスヤのベッド組もいる。

黒瀬さんが、五省会ニュース創刊号の「大地を踏む」に登場したのは昭和五十五年の十一月。その当時、左片麻痺の黒瀬さんは、左の手足が不自由で、やっと歩ける状態。きびしい訓練をつづけながら、夫婦が力を合わせて〝青い鳥〟を開園（自宅敷地内で五十五年四月一日）し、「子どもたちの幸せを生き甲斐にしています」と喜びを語っていた。

三年九ヵ月ぶり、二度目の登場である。

――からだの具合はどうですか。

「おかげさまで、首が左右、後ろに動くようになりました。口が軽くなり、舌をかまなく早口でしゃべれるようになりました。左手の訓練はかかさず続けています。さがるようになったのが、とても嬉しいです。

そうそう、院長さんの厚生大臣賞おめでとうございます。五省会ニュースは、いつも楽しみにしております」

――園児たちがいっぱいになりましたね。

「開園当時は四人だったのが、今では二十一人になりました。ご覧のとおり、目もはなせません。昨年から今年にかけて保母さん二人にきていただきました」

――せまくなりましたね。

「ハイ、そうです。後ろに敷地があるので保育室の増築を考えています。みんなと、いろいろ相談しているんですよ。国鉄から払い下げの客車を入れようかと思ったこともあります。夢がいっぱいです。それに妻がよくやっくれるので心強いです」

――奥さんも大変ですね。

「私たちは子どもが大好きですから、子どもたちと一緒にいるときが一番楽しいです。また子どもたちの親ごさんから喜んでもらえるのが、とても励みになっています」

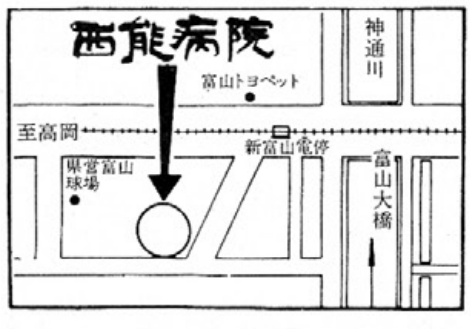
ぴったり呼吸のあった黒瀬さん夫妻、そして保母さん、がんばってください。

医療法人　西能病院の診療体制

●年中無休・24時間受付の診療体制を敷いております。●救急車(2台)は、要請により出動致します。

一般受付時間（日曜・祭日は休診）

診療科目	午前	午後
整形外科	月～土 8:30～12:00	月～土 16:00～19:00
リハビリテーション科	月～土 8:30～12:00	月～土 13:30～19:00
内科	月～土 8:30～12:00	月～土　病棟回診 火・夜診16:00～19:00
ハリ治療	月～土 8:30～12:00	月～土 13:30～17:00
形成外科	毎月1回 8:30～12:00	（診察日は受付でおたずねください。）



◆医療コンサルタント（毎週土曜14:00～16:00）

新たに医療相談日を設けました。（院長、又は副院長が相談にあたります。）整形外科の病気はもちろん、関連ある色々な病気について治療・予防のためのアドバイスを致します。又ご希望があれば専門の医師への紹介も致します。お気軽にご利用下さい。事前に、受付に時間予約をして下さい。(TELでも可＝0764－41－2481代)

◆メディカル・ソーシャルケースワーク（毎日8:00～17:00）

医療費や入院などにかかわる経済問題・退院後の生活設計など、病気以外の心配事や悩みに専門のケースワーカーが親身になってご相談に応じます。（秘密厳守）ご遠慮なく、受付や看護婦に申し出て下さい。

◆栄養指導（毎週水・土）

現代病といわれている肥満・糖尿病・その他の病気にたいして、専門の栄養士が具体的な食生活を指導致します。受付にお申込下さい。

◆重病患者さんの送迎について

重症のため、一般の車で搬送できない患者さんには、入退院にあたって、病院の患者専用車をご利用いただけます。受付に申し出下さい。

《交通機関》
市内電車……新富山電停下車・徒歩2分
地鉄バス……新富山停留所下車・徒歩2分
通院バス(順路)……西能病院→富山大橋→丸の内→新富町→♀富山駅→桜橋通り→♀西町→♀旅籠町→丸の内→富山大橋→西能病院
（♀は通院バス常時停留所、その他臨時停車します。）